

金をドブに捨てよ

内部留保が何億あると会社の力にはならない。会社はパブル崩壊やリーマンショックでそれを思い知らされた。危機を乗り切ることができたのは人材がいた会社。日頃から社内、社外の教育によって厳しく鍛えられ、思考力、行動力、精神力に優れた社員が揃っている会社だった。

母親は二千万円教育投資する

愛知県や栃木県宇都宮市とその近辺の、東大入学者数がこの数年顕著に増加しているそうである。トヨタ自動車とホンダの大工場がある地域である。

こうした地域は高収入で教育熱心な家庭が多い。子供が小さい時から塾通いをさせる。勉強ができる子が多いので、学習塾、予備校は主力を投入する。東大合格者が増えれば、塾、予備校は繁盛する。生徒同士の競争が激しくなり、ますます東大など一流大学への入学者が増える。

教育にお金をかけられない家の子は、一流大学に入れない。昔（八十年前）は貧しくても勉強ができる子は、校長、村長、お大尽（財産家）といった有力者が目をかけ、進学校に入れた。学費を出してあげた。その子が東大に入れば学校の、村の名譽であり、またお大尽の人材となるのが約束された。

個人主義と核家族化がこのよき風習をおち壊し、貧しい子が東大に入ることは稀になった。教育にはお金がかかる。このことを一番よく知っているのは家庭の主婦である。子供をいい大学に入れようと思ったら、小学校、幼稚園から有名校を目指す。そのため高い月謝を払って塾通いをさせる。

もったいないから教育しない

ある地方の地場産業。従業員三十人。社歴五十年の老舗である。青年会議所で一掃だった友人が社長に「研修を受けてみてはどうか、自分も受けて非常に良かった」と研修を紹介した。社長と右腕の部長は営業マンの説明を聞いて、参加を決定した。

翌日、部長から研修会社に電話があった。研修参加を取り消してくれと言った。申し訳なさそうに理由を言った。「会長が、もったいないからやめると言うもんで」「もったいない」は先般なくならなかったノーベル平和賞受賞者、ケニアのワンガリ・マタイ女史が「もったいないキャンペーン」によって世界中に知らしめた日本語である。

食物など物をむだにする悪習が染みついてしまった現在の日本人にも、この道徳の復活は喫緊の課題といえるだろう。会長の「もったいない」気持ちよく解る。

だから公立校の教師が自分の子を私立校に入れ、また親しい父兄に「もし入学金（五十万円から百万円）のゆとりがあるなら私立に

経営管理講座 275 染谷和巳

って戻ってこない。むだにお金を遣う、金をドブに捨てる気持ちになる。昔、貧しくて上の学校へ行けない子を村長やお大尽が救った話ですが、実はこれはお金よりも親の反対のほうが本当の原因である場合が多かった。

親は何年間も上の学校で、遊ばせる。より、すぐ働かせて収入を得る身になってほしい。だから進学に反対する。無理をすれば学費は出せるが「もったいない」のである。したがって村長やお大尽にとってその親の反対を説得するのが一仕事であった。

この昔気質の価値観には一理ある。猫も杓子も大学出の時代である。そのうち半分は高校を出て職につくほうが妥当な人である。

ある社長が「教育にお金を遣い過ぎて潰れた会社は「社もなし」と言っていた。「もったいない」という人とは別に「外部の教育はすべて私がする」。社員の教育はすべて私がする」と固い信念の元に自分で社員教育をしている社長がいる。二十人三十人の小規模の場合はいが、百人二百人となると無理になる。その時はやはり社長がくれた教育を社長に代わってしてくれる外部機関を見つけてはならない。

「もったいない」という人とは別に「外部の教育はすべて私がする」と固い信念の元に自分で社員教育をしている社長がいる。二十人三十人の小規模の場合はいが、百人二百人となると無理になる。その時はやはり社長がくれた教育を社長に代わってしてくれる外部機関を見つけてはならない。よって外部教育機関は社長代行業であり、印刷屋と同じ会社の下請けである。社長がお金を払ってもよいところを捜す。営業マンが気に入ってやってきたがダメだった、名前が通ってはい

教育にお金を遣い過ぎる会社

ある社長が「教育にお金を遣い過ぎて潰れた会社は「社もなし」と言っていた。「もったいない」という人とは別に「外部の教育はすべて私がする」。社員の教育はすべて私がする」と固い信念の元に自分で社員教育をしている社長がいる。二十人三十人の小規模の場合はいが、百人二百人となると無理になる。その時はやはり社長がくれた教育を社長に代わってしてくれる外部機関を見つけてはならない。

よって外部教育機関は社長代行業であり、印刷屋と同じ会社の下請けである。社長がお金を払ってもよいところを捜す。営業マンが気に入ってやってきたがダメだった、名前が通ってはい